〈Infinite Dendrogram〉 死して立ち上がる者

ベトベトー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは一人の青年の物語▼この小説は現在「小説家になろう」にて絶賛連載中の〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉の二次創作です▼※なるべく原作に遵守していきたいところですが、至らない点も多々あると思いますので温かく見守って頂ければ幸いです▼カルディナをメインで話が続く予定です

目次

スタート
第０話　始まり　1
月雲花風
第一話　始まりと終わり　4
第二話　ネフティス　15
第三話　サボテン狩り　21
第四話　次の〝狩場〟へ　28
第五話　亜竜級　33
第六話　霧の中の魔物　39
第七話　抗う死者　45
第八話　終幕　50

スタート
第０話　始まり

□２０４４年３月１６日　若葉紫陽

世間では学生の卒業式や大学の合格発表が終わり、街を練り歩く若者の姿が多く見られる。だが、ここではそんな浮かれた空気とは程遠い、ピリつくような空気が流れていた。

場所は東京都内の某所の病室。一般的な病室のイメージとは異なり室内はオレンジや赤を基調とした明るい壁紙を使用しており、暗いイメージはない。窓は開け放たれていて、外からのまだ少し寒い風を取り込んでいる。

中は白いベッドが大きなスペースをとっている。ベッドには一人の青年が思い悩むように座っていた。年の頃は童顔故に十六、十七に見えるが実際はもう四歳ほど上だ。身長は高く、１７５センチほどだろう。名を若葉紫陽と言う。

青年というよりは少年といった顔つきのベッドに腰掛けた青年――若葉はあるゲームのパッケージを握りしめていた。そのゲームのパッケージには〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉とあった。定価の二倍近い価格――それでも安い方だが――で買ったこのゲームは今最も勢いのあるゲームだ。

そのゲームは実現不可能と言われていたダイブ型ＶＲＭＭＯを実現したことで有名になった。極めつけはリアルと遜色ないグラフィックと操作性だ。売り切れ続出で学校が始まるまでの間に始めようと考えている者も多いことだろう。

この青年もそのうちの一人だった。ケガによって満足に身体を動かすことの出来ない紫陽にとってリアル同様に動き回れるということは常人の何倍も魅力的に思えた。

〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉に対する期待は否応なしに高まってしまっていた。

「……よし、いくぞ」

ベッドテーブルに置いていたサイコロを握りしめ、投げ出す。ゲームの下調べをした際に〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉内には七つの国があることを知った。

騎士の国『アルター王国』

刃の国『天地』

武仙の国『黄河帝国』

機械の国『ドライフ皇国』

商業都市郡『カルディナ』

海上国家『グランバロア』

妖精郷『レジェンダリア』

この七つの国家。どれも心惹かれる国家で捨てがたい。故に若葉はサイコロで所属国家を決めようと考えたのだ。特に

「……エルフとか雪国美女はいいよなー」

……まあ、彼も若者らしく自分の欲望に忠実であった。

一ならアルター、二なら天地、三なら黄河、四ならドライフ、五ならグランバロア、六ならレジェンダリアにする。

カルディナがないのは砂漠の美女を思いつかなかったからである。

「さあ、どうだ!?」

サイコロの角をテーブルと指で押さえつけ、固定する。その状態からもう片方の手で面を擦るようにして回転させる。

サイコロは白いテーブルの上を音をたてながらぐるぐると回る。少しずつその勢いは弱まっていき、最後に小さく跳ね、コツンと音を立テーブルに当たり真っ二つに割れた。

「嘘っ！　そんなことある!?」

あるのである。若葉の決めたサイコロの目のどれでもない。とすればこれは――

「……カルディナってこと?」

こうして一人の青年の運命が決まった。

この結果がどのような結末をもたらすのかまだ誰にも分からなかった。

月雲花風

第一話　始まりと終わり

◇

□２０４４年３月１６日　若葉紫陽

馬鹿みたいな分厚さの説明書を放り投げ、僕はヘルメット型のゲーム機を手に取る。鈍器のような説明書全部を読んでいられない。それより待ち望んでいたゲーム機だ。待ちきれないとばかりに僕はゲーム機を被る。

夢のようなゲームを出来るという高揚感からか、僕は震える手でスイッチを入れる。直後視界が暗転する。思わず目を閉じ、開けたときには既にそこはゲームの中だった。

◇

「はーい、ようこそいらっしゃいましたー」

そこは書斎だった。一体ここは何処なのか、そんな疑問はすぐに頭から吹っ飛んだ。

今僕の中では二つのことで頭がいっぱいだった。それは自分の目を疑うほどのリアルさ。もう一つは支えもなしに両足で立てていることへの驚き。

その二つは目の前にいる非現実的な存在を無視してしまうほどの衝撃だった。

「どうしたのー。何か気になることでもあるのー？」

声を掛けられ、やっと我に返る。思わず喜びで叫び出してしまうところだった。危ない危ない。僕はジッとこちらを見つめるそれに意識を向ける。

それは猫だった、ただし二本足で立ち、おまけにベストを着ている。とてもかわいらしいが、残念僕は犬派だ。

「いえ、何でもないです。……ところで僕は若葉紫陽って名前なんですけど、あなたのお名前は？」

「おー、礼儀正しいねー。僕の名前はチェシャ。〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉の管理ＡＩ１３号のチェシャ。よろしくねー」
「よろしくお願いします！それで僕は何をすればいいんですか」
「ここでゲームに関する諸々の設定をしてもらうよー。まずは描画選択だねー。サンプル映像が切り替わるからどれが良いか選んでねー」
チェシャと名乗った管理ＡＩがそう言うと周囲の風景が一変した。ヨーロッパ風の街並みが広がっている。周囲の風景は一定の間隔で見え方が切り替わっていく。現実からＣＧへ、ＣＧ　からアニメーションへと。
「えっと、それならこのままで」
「オッケー。それなら次はー」
この調子で設定を続けていった。
僕のゲームの中での名前はルーツ・ハイドレンジにした。名前のもじりだ。
ゲーム内での姿（アバター）を作る際にはリアルの身体をデフォルトに弄って作った。最初はチェシャのように動物型の姿にしようかと思ったが動きにくさ、時間がかかるなど面倒なのでやめた。姿は身長や基本的に変えていない。ただ、髪色や目の色は変えた。髪色は派手なピンク、目の色は灰色にした。
「よーし、それじゃあ次はルーツの初期装備を決めよー。あとこれはルーツの収納カバン、一般用のアイテムだからあっちでも買えるよー」
「ありがとう、容量は無限なんですか？」
「いいやー、重量は一トンぐらい、サイズは教室一個分くらいだよー。もっと大きいのもあるから、足りないと思ったら買い換えてもいいよー」
次は初心者装備一式を選んだ。中東風で、はちみつ色の長袖のガウンが特徴的な装備だ。
そして次は――

「〈エンブリオ〉の移植をするよー」
エンブリオ、あまり詳しくないがこのゲームの最大の特徴と言われている。千差万別、文字通りその人だけのオンリーワンだ。下調べをする際には何度も出てきたのだ。興味がないと言えば嘘になる。
「はーい、これで移植かんりょー」
いつの間にか卵形の青い宝石が僕の手に埋め込まれていた。劇的な演出もなく、あっさりと〈エンブリオ〉の移植が完了する。
僕が拍子抜けした様子を見てからか、チェシャが付け加えるように言う。
「〈エンブリオ〉は君が〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉をプレイする間ずっと一緒にいるよー。だから大切にしてあげてねー」
「もちろんです」
「最後は所属する国家を決めてねー」
そう言ってチェシャは七つの国の首都の様子を映し出す。やはりどれも魅力的だがもうサイコロでカルディナと決めているのだ。今さら変える気はない。
「カルディナで」
「オッケー、ちなみにあとで所属国家を変えることも出来るよー。色んな国を見て回るのもいいかもねー。じゃあこれから君をカルディナの都市国家コルタナに送るよ」
続けてチェシャが胸に手を当てて語るように言う。
「これから君がどんなことをするのか、どんな物語を紡いでいくのかは全て君次第だ。これから始まるのは無限の可能性」
「〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉へようこそ。〝僕ら〟は君の来訪を歓迎する」
そうチェシャが言った直後、目の前のあらゆる物が消失した。書斎が消え去り、自分が宙に浮く。僅かな浮遊感のあと僕の身体はカルディナの大砂漠に向け高速で落下した。

◇

□都市国家連合カルディナ・商業都市コルタナ　ルーツ・ハイドレンジ

「……うう、生きてる……」

改めて生きていることの喜びを感じながらのろのろと僕は起き上がる。

ここは確かコルタナと言ったか。喉から入ってくる風が熱い。咳き込みながら辺りを見渡す。正面の大門以外は果てのない砂漠だった。

熱風と砂塵の舞う砂漠。赤色の砂でできた砂丘は暑さのあまり陽炎が揺らめいている。

正面に広がるのは細かい装飾を施された巨大な門と城壁だ。城壁は直線を引いたように真っ直ぐに見える。上空からとてつもなく巨大な円か四角形が見えるだろう。

「よし、行くか」

マスター故かチェックもなしに大門を通り、コルタナへと入る。

城門の中は映画の中へと入り込んでしまったかのようだった。荷車を牽く様々な生き物達。売っているのは魔法の武器か、ガラスケースに陳列された剣は輝いて見える。バザールでは人間以外の種族もいてジロジロ見ないようにするのは難しい。

こんな光景を生きているうちに見れるとは思っても見なかった。

特に予定もないので今日は観光でもしようかと考える。三倍時間なのでジョブや狩場に行くのは明日からでも良い。それに――

「お前も早く孵化するんだぞー」

トントンと〈エンブリオ〉の卵をつつく。どんなタイプの〈エンブリオ〉になるかわからないので、新しく装備を買っても無駄になるかもしれない。

……ただ、男心を惹き付ける魔法の剣は見てみたい。冷やかしにでも行こうか、そう考えて僕は足早に武器屋へと向かった。

武器屋には様々なタイプの武具が置いてあった。『盗難防止の魔法がかけてあります』と札が置いてあるが、別に窃盗をする気はない。大人しく触っていると店の奥から店員が出てきた。
「マスターの方でしたか。それならこれはどうです？天地からの輸入品です」
そう言って店員がわざわざガラスケースから日本刀のような剣を出す。値札には四千万リルとあった。買えるわけがない。
「……ま、まあまあかな？」
冷や汗と声が震えないように気をつけながら、それを店員の手に押しつけるようにして返す。
やばい、僕のことを金持ちかなんかだと勘違いしてるのかも。よく見れば店内は高そうなシャンデリアやタペストリーなど多くある。適当に武具を持って「ふーん」「なかなかいいね」、なんて言ってたのが不味かったのかもしれない。
「でしたらコチラはどうです？これは黄河の名匠の一品です。お値段の方は１０％引きで五億四千八――」
「いえいえいえいえ、お気になさらず！おや、もう時間のようだ。失礼、もう帰らなくては！」
来た時と同じように足早に店を去る。
あそこに居たら終いには何億もする剣を買わされてしまう！
次は露店で回復アイテムを買った。露店は多くの種類があった。食欲をそそる匂いに釣られ思わず串焼きと唐揚げを買ってしまった。
しばらく広い通りを真っ直ぐに歩いていると人混みが見えた。話を聞けばこれからパレードが行われるらしい。
「何のパレードですか？」
環鎧（リングメイル）を着た騎士風の男が答える。
「私もあまり知らないが、どうやらＵＢＭを討伐したらしい」
ＵＢＭ、〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉内でも屈指の強さを誇るモンスターのことをそう呼ぶらしい。それを倒したのだ、おそらくトッププレイヤー層なのだろう。
トップ層を見ておいて損は無いだろう。僕はそこまで強く成れる

か分からないが。
だが、パレードにはまだまだ時間があるらしい。もう少し観光を続けようか。まだ日は落ちていない。昼の三時ごろだろう。
それに宿や飲食店を探す必要もある。
今度は通りを見るだけではなく、迷路のような路地を見てみるのも面白いかも。そう思い僕は建物の隙間へと入って行った。
路地は薄暗く、曲がりくねっていて歩き辛い。加えて大人が二人居れば道が塞がってしまう。こんな所で襲われれば一溜りもない。やっぱり戻ろう。僕は溜息をついて、もと来た道を戻るべく身体を後ろに向けた。
「……まじか」
狭い路地を二人の男が塞いでいた。一人の男はナイフを握っている。強盗かチンピラか。少なくとも僕にとっての味方であるはずが無い。僕が走り出すと二人組は怒声を浴びせながら追い掛けてくる。
「オイ、待てこら!」
「逃げてんじゃねー!殺すぞ!」
路地を飛び跳ねるように駆けていく。
「止まっても殺すクセに!!」
右、左、右、目まぐるしく狭い道を駆けていく。路地を形成する壁は次第に古く、ボロく、みすぼらしいものへと変化していく。
「……逃げ切れた?」
呟くように言う。息切れで声もろくに出ない。一息着ついて、後ろを見る。どうやら逃げ切ったようだ。
「随分、刺激的な鬼ごっこだったな」
もう懲り懲りだけど。
僕はここから通りに出るための道を探し、歩き始めた。辺りにはみすぼらしい身なりの浮浪者や孤児と思しき子供達がいる。あんな子供でも囲まれれば終わりだ。気をつけながら人の声がする方へ向かう。
あーあ、それにしてもひどい一日だ。これ以上悪くなるとは思えないほどだ。何が迷路のようで面白そうだ。つい少し前までは、海外の

観光地でそんなことをしたら誘拐か犯罪に巻き込まれるのは知識として知っていたのに。どうやら僕はコルタナの熱気にあてられ、少しハイになっていたのだろう。もう少し落ち着いて、慎重に行動しよう。

◇

無言で路地を歩いていると急に声が聞こえなくなった。通りはまだ先だが近づいている筈だ。不思議に思いながらも足を進める。

そんな中、いきなり叩きつけるような音が鳴り響いた。さらに食器や金属類の物を落とした時に鳴る音。ついさっき自分を戒めたばかりだ。争いごとに首を突っ込むつもりはない。

僕はそこから少しでも離れるべく、足を逆方向に向ける。

そんな僕のことはお構いなしに争いごとは続いている。金切り声や喚き散らす声。でも、僕に出来ることは何もないので、耳を塞ぎ足を進める。

「何でそんなことも分からねんだッ!!この糞ガキがァッ!!」

続いて頬を打つような音が鳴り響く。乾いた音でひどくそれが耳に残った。僕は足を止めた。きっと僕の予想してた何倍もひどい光景が広がっているのだろう。だが、自分に何が出来る?死ぬのがオチだ。そうだ、お前は一刻も早く通りに出て、ログアウトするべきだ。躊躇しながらも僕はそこから離れるべく――

「何休んでんだァ!起きろォ!」

路地に怒号が響く。もう聞き逃すことは出来なかった。

脳内に光景が浮かび上がる。父親が自分の子供に暴力を振るっている姿が容易に想像できた。

掠れた――息切れした僕の何倍も――声が路地にこだまする。助けに行かなくては。

堰を切ったように僕は路地を駆け抜ける。狭く、ゴミを積んだ袋が

投げ捨てられていて思うように進めない。その間もずっと音は路地に響いている。
「クソガキが……、殺してやる」
やばい、やばい、こんなこともあるのか。ゲームだと思っていた。もっと優しい世界だと思っていた。目の前が点滅し、頭痛のようなものに襲われる。座り込んで誰かに助けを求めたかったがそれはできなかった。僕がやるしかない。
「――クソッ！こんな時どうすりゃ良いんだよ!?」
走りながらでは上手く考えが纏まらない。もう声がする家が近い。クソッ――なるようになれだ。僕は扉を蹴破り民家へ入る。
「あぁ、誰だテメーは!?勝手に人ん家入ってんじゃねえ!!」
「やめろ！それ以上やれば通報するぞ」
突然の闖入者に場が停止する。部屋の中心にいるズタボロの麻布を着た男が困惑と恐怖に後ずさる。
その家の中はひどい有様だった。家具はボロボロで床はホコリまみれ。それに――床にはボロ雑巾のように女の子が転がっていた。全身青アザだらけで見ていて痛々しい。
やったのは両手を挙げて、後ずさるこの男だろう。娘の父親か、何にしても下衆に違いあるまい。
「……通報って、なんだよ。ただ娘を躾けてただけだぜ」
「動くなよ。早く、その子から離れろ」
子供は生きているのだろうか、胸板は動いていない。どちらにせよ、このままだと死んでいただろう。
「……ぁぅ……」
子供が呼吸をした。良かった、まだ死んでない、そう安堵して一瞬気を緩めた。その油断を見てとったのだろう。男が後ろ手でナイフを握り、突進してくる。
そこからは全てスローモーションで見えた。
突進してくる男、それに対して僕は何処までも無力だった。喧嘩なんて小学生以来だ、戦えるわけがない。避けることも出来ず、僕はナイフに貫かれた。のしかかられ、体重で押し潰される。体力ゲージが

みるみるうちに減っていく。
「……ったく、馬鹿なガキはママのおっぱいでも吸ってろ」
そう言って男は子供の方へ向かう。ナイフは手に持ったままだ。ゆっくり振りかぶり、顔面に突き立てようとする。
親が子供を殺す。平和な世界で培った常識が粉微塵になっていくのを感じる。だめだ、止めなければ――
――そう？でもあんたに出来ることは無いんだし早く死んだら？
駄目だ死ねない。ここで死んだらリアルに戻れなくなる。あっさりと命を落としてしまえる世界に囚われてしまう。こっちが現実になってしまう――
――あっそ。じゃあさっさと立ち上がりなよ。残された時間は長くないんだから
体が崩壊していく、それを無理矢理繋ぎ留める何かがある。【ミイラ化】の状態異常が表示される。手の甲にあったエンブリオの卵が紋章へと変化する。
『さあ、行きなよ。いつまで突っ立ってるつもりだい？』
男に向けて飛びかかる。僕の腰に差していたナイフを男の背中に突き立てる。
「――アァ!!」
暴力を振るう。そのくせ、振られたことは少ないのか二度突き刺すと横たわり、呻くだけになる。そんなことより今はこの子だ。露店で買った回復ポーションを飲ませる。上手くいかず少女が喉を詰まらせるがどうやら飲ませることはできたようだ。
「――ゴホッ！」
「クソッ、まだ足りない！」
早くこの子を医療機関に連れて行かなければ。
お姫様抱っこをして、路地を駆け抜ける。異様な様子だったのか、

出会う者も驚いて脇へ退ける。
全力疾走して、やっと通りに出た。通りはパレードの真っ最中だったのか騒音が鳴り響いている。人垣が邪魔で医療機関を探すことさえ出来そうにない。
助けを求めるべく声を上げる。
「誰かッ！この子を助けてくれ!!」
聞こえてないのか。もう一度叫ぶ。パレードの邪魔をする不届き者に気づき、多くの者がこちらを振り返る。悲鳴が上がり、飛び退く者もいるが気にしてられない。
パレードの主役であるマスターの一人がこちらを認識したのか目を見開く。中華風の装いをした女性だ。高レベルのプレイヤーらしい彼女達なら助けれるかも、そう思い人を押し退けパレードの中心へ向かう。
「――なさ―は――――れ――」
「そ――手―を――せ」
何か言っているが聞こえない。人垣が僕を認識し、モーセのごとく割れる。
中華風の女性が彼女の仲間を手で制し、剣に手を掛ける。どういうことだ。敵意がないことを示すため、助けを求めながら近づく。
その時、僕の声がくぐもっていることに気づいた。
僕が何を言っているのか分からないほど。
「――しょうが無いわね。《アーサナ》」
そう女性が言った瞬間、僕の手が落ちた。続けて足から徐々に輪切りに、最後に頭が――
【致死ダメージ】
【パーティ全滅】
【蘇生可能時間経過】
【デスペナルティ：ログイン制限２４ｈ】

To be continued

第二話　ネフティス

□２０４４年３月１６日　若葉紫陽

ヘルメット型ゲーム機を脱いで、溜息をつく。体にまとわりつくような倦怠感。原因は分かっている。〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉でのことだ。僕がやった事は後悔していない。

だが、気がかりだった。

「……あの子、大丈夫かな」

それに〈エンブリオ〉の発現。こうして考えてみるとログイン制限は本当に重い制約だ。あちらでは三日間も過ぎているのに、その間自分は何にも出来ない。

「あ、それに砂漠の美女にも会えてないじゃん」

冗談を口にしてみるが、気は休まらない。しばらく寝ようか。そう考えてゲーム機を置き、カーテンを閉め目を閉じる。

しかし、僕の隣人は寝させてはくれないようだ。カーテンがこじ開けられる。

「ん。美女がどうしたって？振られたのか？」

隣のベッドに寝転がっているのは西園寺ガブリエルだ。どうやら僕の独り言を聞いていたようだ。

「告白もしてねーよ。それから僕は寝るから黙っててくれ」

「そりゃ無理だな。これから俺とお前は将棋をやるんだ。さあスマホを準備しろ、俺の容易は万端だぜ」

「勘弁してくれ……」

嫌々ながらも一戦行う。西園寺は弱いので飛車角落ちだ。この男は勝負事が好きで、同室ということもあって、よく二人でゲームをやっている。結果、軍配は西園寺に上がった。そろそろ飛車角落ちは厳しくなってきた。

「よーし、俺の勝ち！」

ガッツポーズをして、金髪を振り回し喜ぶ。染めているわけじゃない。西園寺はフランス人の血が入っていて、彫りが深く、ギリシャ彫刻のように整った顔をしている。

「おっと、ユウナからのメールだ。ちょっと待て」
そのため非常にモテる。お見舞いには中学生から大人の女性まで幅広い年齢層の女性が来る。非常に妬ましいが嫉妬してもしょうがない。だけど――
「僕にも彼女欲しいよー。シクシク」
メールを終え、西園寺が言う。
「でも、お前神崎さんはどうなんだよ」
「？神崎さんがどうかしたのか？」
神崎さんは僕たちと同じようにこの病院の患者だ。時々、三人で話すこともあるが口数の少ない人で特別仲が良いわけではない。
「あの人はお前を――いや、何でもない。それよりそれデンドロだよな？」
「ああ、やっと買えたんだ。西園寺もやってるよな、デンドロ。今はどこにいるんだ？」
西園寺は初日組だ。西園寺は既にレベルカンスト、〈エンブリオ〉の形態はⅥだ。〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉の情報の多くはこの男から来ている。もっとも所属国はレジェンダリアだったので、自然僕の持つ情報も偏っている。変態の国ってなんだよ、おぞましい。
……それはともかく、最近は各国を旅して回っているらしいので、もしかしたらカルディナにいるかもしれない。
「ああ、今はカルディナのヘルマイネにいるなー。お前はどこ所属にしたんだ」
「カルディナだよ。驚いたな、僕はコルタナにいるんだ」
「おお、こっちに来る機会があれば街を案内してやるよ。今立て込んでてな、そっちには行けそうにねーんだ。まあ、あと数ヶ月はヘルマイネにいるからな。来れたらこいよ」
しばらく話していると西園寺が〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉に用事があるとログインした。
そこからはいつも通りの――〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍを持ってなかった頃と同じ――日常。だが、何をするにも身が

入らない。
それにしてもおかしな話だ。ゲームのことでこんなに悩んだのは何時ぶりだろうか。異世界に飛ばされたのかと見紛うほど高度なグラフィック、感情を感じさせる高度なＡＩ、これらがあるからだろうか。
とりとめもなく考え続け、やがて日が暮れ暗闇の中で街が煌々と輝く。日付は変わり、朝食を食べ、少ししてからログイン制限が解けた。
◇
〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉にログインした僕はコルタナの大門前に立っていた。チュートリアルを終えた時と同じだ。セーブポイントを登録してないからだろう。
「そうだ、エンブリオは？」
左手の甲には蒼い宝石の代わりに黒色の紋章があった。紋章は十字架の上部が楕円形をしていて、女性を表す性別記号のような形だ。
『女性を表す性別記号とは随分酷い言い草だねマスター。ひょっとしてその紋章を見せびらかして歩くのは嫌かな。ならあんたはさっさと手袋でもグローブでも買うといいさ』
姿は見えないが、どこからか声がする。ならこれは――
「お前は――僕の〈エンブリオ〉なのか……？」
「その通り、気付くのが遅いんだねマスター」
いつの間にか僕の目の前に一人の中性的な美少年が立っていた。
純白の絹で出来たコートを身に纏っていて、髪は艶を持った黒色で肩にかかる程度の長さ。陽光にあたり小麦色の肌は黄金色に煌めき、細めた緑眼は品定めをするように僕を射抜いている。
「オレの名前はネフティス。〈エンブリオ〉、ＴＹＰＥ：メイデンｗｉｔｈアームズ。一つ言っておくがオレは女の子だぞ？」
からかうようにそう言って、ネフティスは笑った。
◇
ネフティスの自己紹介から数十分後、僕たちはオアシスの近くの喫茶店で休んでいた。少女についての情報は殆ど集まらなかった。精々分かったのは、「ミイラ男がパレードに乱入した」、ということ

だった。ミイラ男というのは僕のことだろう。
しかし自分がそんな格好をした覚えがない、とすればネフティスのスキルだろうか。
「そうだね、オレのスキルだよ。しかし運が悪かったね」
「何が？」
「オレのスキルのおかげで少女は助けれた。でも、そのスキルのせいであんたは死ぬ（デスペナする）ことになったことだよ」
そこに文句をつける気はない。誰だって少女を手に持ったミイラ男が現れれば警戒するだろう。むしろ誰も助けれないという最悪を避けることが出来ただけ僥倖だ。
「そう言ってもらえれば幸いだよ」
僕の心を読めるのか。これは困った、迂闊にエロいことも考えられない。
「そうだよ。ついでに言えばオレはあんたのパーソナルから出来たんだ。つまりあんたの性癖を全て宿していると言っても過言ではないんだよ」
ボーイッシュ日焼け少女？まずいな精神（パーソナル）を疑われかねない。
そんな意味のない会話をやりながらも少女の情報を探す方法を考える。パレードに出ていたクランの名前は『ガーディアンズ』というらしい。そのクランの本拠地は別にあり、メンバーはコルタナの市長の提供した宿に宿泊していて、当然僕のように何の伝手もない人間がお目通りすることは出来ない。
「……やっぱ宿近くに張り込むしかないのかな」
チリンチリンと客を告げる鈴の音が店内に響く。テーブルに肘をついて、何とはなしにそちらを見る。
「――ッ!!」
思わず勢いよく席を立つ。椅子が音を立て、注意を引くが気にしてられない。
「……？」
不思議そうにこちらを見つめる女性、服装はあの時と違うが間違いない。

僕を殺(デスペナさせた)した人だ。
「あ、あのすみません。あなたは『ガーディアンズ』のメンバーの方ですよね？」
「ええ、そうよ。わたしはクラン『ガーディアンズ』のサブオーナーのラインハイトよ。貴方は……、いえ言わなくていいわ」
ジッと僕たち二人を見つめる。まるで腹の底まで見透かすような鋭い視線だ。
「……分かった。わたしのファンね！」
違います、とは言い出せず頷く。迫力に気圧されてしまった。ネフティスが呆れ顔で僕を見ている。
「いやー、照れるねぇ。最近わたし達宛てのファンレターが届くようになってね、いつかわたしにもファンが欲しいなーって思ってたのよ」
「お姉さーん、オレ達はあなたのファンじゃないんだよ。ごめんね、連れが誤解を招くようなことして」
「そんな……。じゃあ、貴方達は一体？」
ネフティスが喫茶店のドアを手で指して言う。
「こんな所ではなんだから、外でね？」
◇
事情を説明するとラインハイトさんは少女の場所へ快く案内してくれた。ラインハイトさんによると少女は治療を受け、既に回復している。また、父親は官憲に捉えられ現在はティアン用の刑務所にいるらしい。
バザールを抜け、僕達が入った門とは反対の位置にある門――東西門のうち僕達は東門から来た――へとオアシスを迂回して向かう。
「ここよ」
そう言ってラインハイトさんが指した建物はコルタナで見た建物の中でも大きめだった。岩でできた箱型の建物を組み合わせた造りで、広い庭もあり学校のようだ。庭には子供達が駆け回って遊んでいる。
「当たらずとも遠からず。ここは孤児院よ。あの子はこの中にいる

わ」
「へー、彼女はここに居るんだね、マスター行ってきなよ」
僕の眼は校庭で走り回る子の一人に釘付けになっていた。少し痩せてはいるが楽しそうに他の子供達と遊んでいる。笑顔を浮かべ、元気に――
「いえ、やっぱりいいです。僕のことを彼女は知らないでしょうし」
「そう、ホントに良いの？」
もちろん。もともとは人殺しを見過ごしたくなかった。そんな中途半端でろくに覚悟もない身勝手な正義感からやっただけのことだ。
でも――
「おーい、こっちにパスしてよ」
楽しそうに遊んでいる。その姿が見れて本当に良かった。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第三話　サボテン狩り

□商業都市コルタナ　ルーツ・ハイドレンジ

孤児院を離れた後、僕達はやることもないのでバザールに行っていた。太陽はまだ上り始めたばかり、宿に戻るのにも早過ぎるので面白そうな屋台を冷やかして回っているのだ。僕達は会話が途切れない程度には仲が良くなっていた。

「ところで、貴方はこれから何をするの？」

ラインハイトさんが言う。そういえば彼女は昼には宿に戻る必要があるって言っていたな。そんなことを思いながら返事をする。

「特に予定はありませんね」

そう言ったあとに付け加える。

「クエストでも受けてみようかと思ってます。ジョブや武器を見に行ってみたいですね」

「そう、わたしは宿に戻るから。もし何か相談事でも有ったら気軽に来てね。場所はここ。ボーイさんにも言っとくから」

そう言ってラインハイトさんは僕にフレンド申請を送る。奇妙な出会いだったが、もう彼女とはお別れのようだ。

今までの感謝の礼を言って別れる。彼女は人ごみの中から手を伸ばして振っている。しばらくは会う機会も無いだろう。少し残念に思いながら僕もセーブポイントに向けて足を――――

「ストッーーープ!!おーい、お姉さん待ちなよーー！」

ネフティスが大声を出して、彼女を呼び止めた。一体どうしたんだ？

「一体どうしたんだ、じゃないよ。いまオレ達には重大な問題があるだろ」

「一体それは何だ？」

心当たりがない。ネフティスは溜息をついて言う。

「金欠。もんだーい、最初のデスペナの時とその他諸々のことであと残ってるのは何リルでしょう？」

ゾッとしてアイテムボックスの中を確認する。すると本当に僅か

な硬貨――たった二十リルだけ――が手に転がり落ちた。おまけにチェシャから貰ったナイフもない。
とすると、僕に出来ることは一つしかない。ネフティスもそういうわけで彼女を呼び止めたのだろう。訝しみながらもこちらへ来るラインハイトさんに心を込めて言う。

「ラインハイトさん！お金貸して下さいッ！」

自分でも惚れ惚れするような礼だった。
……ちなみにラインハイトさんは１０万リルをポンと渡してくれた。故意ではないといえデスペナさせたことのお詫びだそうだ。それと初心者向けの武器屋や売店、おすすめの狩場なども教えてくれた。あまりお世話になるのも悪いので、せめてお金は返しますと言っておいたがそれも何時になることやら。
「流石マスター。彼女の罪悪感を煽ってそんなにお金を貰うとは。誰にでも出来ることじゃないよ」
ネフティスが言った。随分な言われようである。
「……褒められてもあんまり嬉しくない」
しかし、これだけあれば武器も良いものが買えるな。ネフティスも欲しい物があれば言えよ。
「じゃあ、オレは日傘が欲しい！この国暑すぎるぜ」
「じゃあ買いに行くか！」
◇
冒険者ギルドに行き、簡単なクエストを受ける。
既に武具は買い揃えており、砂漠の暑さに耐えれるよう高熱、乾燥耐性を持った防具一式を買った。武器はブレイズソードとスティールメイスの二つだ。斬撃、打撃どちらかに耐性を持つモンスターが出た時のためだ。ジョブは使える武器の種類豊富な【闘士（グラディエーター）】をとった。準備は万端、後はクエストを受けるだけ。……だったのだがここからが問題だった。
「……クエスト多すぎ」

「こんなに多いとはなー」
どれを受けていいのか分からない。まだ護衛系のクエストは受ける気はない。あと、時間が掛かりすぎるクエストもだ。カルディナ大砂漠では昼と夜で環境が別世界のように変わる。夜は凶悪なモンスターが跳梁跋扈し、気温も驚くほど低くなる。
ウンウン唸りながら魔法のカタログを読んでいると、僕と同じように唸っている人を見つけた。白髪の少年だ。彼も僕と似たような装備に身を包んでいて、〈エンブリオ〉から彼もマスターだと分かる。
「うーん、どれにしようか」
彼も良いクエストを見つけられずに悩んでいるのだろうか。机の上には注文した料理とカタログがあり、少年はカタログに顔を埋めている。
「君も決めかねてるのか？」
「ん？ああ、そうなんだよな。どれ選べばいいのか分かんねんだよー」
「だよなあ」
少年は頭を抑えて机に突っ伏す。彼も僕達と同じように初心者のようだ。初心者同士一緒にクエストを受けないかと誘ってみるか。
「ああ、いいぜ。俺も勝手が分からなくて心細かったんだ」
「よろしくー。オレの名前はネフティス。こっちは相棒のルーツ。あんたは？」
少年の名前はヴォル・ジェネラル・デストロイヤーというらしい。中々豪快な名前だ。つい最近〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉を買えたので始めたようだ。
互いの話をしながら好条件のクエストを探していき、期限未定の簡単そうなクエストを受けることにした。
難易度ニ：【討伐依頼―商業都市コルタナ　歩くサボテン（ウォーキング・カクタス）二十体の討伐】
【報酬：ｉ５０００リル】『コルタナ周辺に生息する歩くサボテンの討伐を依頼します。歩くサボテンの花、幹が採れれば花は一つ２０リルで、幹は１キロ１０００リルで買い取ります』『また、二十体以上倒

した場合、二十一体目から追加で５００リル払います』
その後、ギルド内で情報を集めたり、戦いのコツを熟練のティアンから学んでいるといつの間にか日が暮れていた。結局、今から行っても依頼は達成出来そうにないので明日の朝から始めることにした。
□西門　【闘士】ルーツ・ハイドレンジ
◇
〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉内で初めて夜を過ごしたが、別段現実世界と変わりはなかった。夜が明けてすぐに僕達は西門に向かう。コルタナには南北東西に巨大な門がある。
特に南北門の大きさはあと二つを大きく上回り、カルディナ大砂漠を移動する交易船や商船の出入口でもある。また南北には門が二重にあって、一つ目の門は城壁から突き出ている。
おっと話がそれたか。それで西門からは普通に出入りができ、少し行った先には『忘れられた町』と呼ばれる狩場がある。今回はそこに行って狩りをするのだ。
「おーい、待ったか？」
「遅すぎるぜ。初めてのクエストなんだ。待ちきれなくて一時間前からここに来てたんだ」
眠そうに目を擦りながらネフティスが言う。
「何でそんなに元気なんだ？マスター、日傘頂戴」
ネフティスに日傘を手渡して『忘れられた町』へと向かう。ちなみにこの日傘は五万リルもする高級品だ。僕の武具全部より高い。贅沢な奴だ。
「暑いのは嫌いなんだよ。美少女の肌が荒れちゃってもいいのかい？」
「なら包帯になれば？」
「え？ネフティスって〈エンブリオ〉なのか？ルーツの〈エンブリオ〉はガードナーなのか？」
雑談をしながら目的地へ行く。そういえば〈エンブリオ〉やスキルの説明をするべきかもしれない。ネフティス、『転生女神　ネフティス』の持つスキルは少ない。

《冥府へと旅立つ者》Ｌｖ１：
ＨＰが０になってから５秒後に自身のステータスを強化し、【ミイラ化】させる。スキルが発動する前に減らされたステータスは強化されたステータス以外、通常値へと戻る。
Ｌｖ１ではスキルの効果時間は１０分間、ＳＴＲが十倍化。効果時間を過ぎれば必ずデスペナルティを受ける。
尚、効果時間中に自身のＨＰが０になればデスペナルティを受ける。
パッシブスキル
ミイラ化すると高い物理耐性を持つ代わりに聖属性や火属性、日光に対して弱くなるらしい。そこでネフティスが包帯に変化することで日光から僕を守るのだ。しかしスキルを気軽に使うことが出来ないのは不便だ。この旨をヴォルに伝えると驚かれた。
「そんな〈エンブリオ〉があるのか！ホントに千差万別だな」
話しているとあっという間に目的地に着いた。大部分が砂に覆われた町だ。昔は人の営みがあったのだろうが、今はもう無い忘れられた町。コルタナという都市の衛星のように寄り添って存在したらしい。
感慨深く見渡していると、ヴォルが自身の〈エンブリオ〉を出した。何をするんだろう。
「見てな、これが俺の〈エンブリオ〉だ。口で説明するより使って見せてやる」
それは角笛のようだった。これでどうする気なのか。ヴォルが角笛を吹き始める。本人の口調とは似ても似つかないような優しい旋律だ。大人しくヴォルの角笛の音に耳をすましているとあることに気づく。
「……これがヴォルの能力なの？」
砂漠から黄緑色の草花がヴォルを中心にして生え始めた。草花は角笛の音に体を揺らし、上へ伸びる。
「ははっ、やめろよ。くすぐったい」
「草花を生み出し、操る能力？」

草花は更に増え、数メートル離れていた僕達のところまで生え始める。花が僕の足を巻き取り、撫でてくる。これ、殆ど殺傷力なくない？

「まだまだァ！」

ヴォルの旋律は勢いを増し強くなる。優しく締め付けていた花は次第に痛くなるほど強くその小さな体で締め付けるようになっていく。

「分かった、分かった！これがヴォルの〈エンブリオ〉か」

「便利そうだね」

「ふぅ。……どうも演奏を聞いて頂きありがとうございました」

ヴォルが角笛を吹くのを止めると植物達も大人しくただの雑草へと変わる。

「それで俺の〈エンブリオ〉なんだが、植物を成長させる能力があるんだ。だけどモンスターは成長させることができねぇ。つまり――」

「なるほど。擬態能力を持った歩くサボテンと相性がいいな」

歩くサボテンはその名に反してまったく歩かないことで有名だ。普通のサボテンに擬態し、普通のサボテンと同じように生活する。ただ、歩くサボテンの近くを歩くと攻撃をしてくる。攻撃方法は主に毒性のある体液や針を飛ばす厄介なモンスターだ。

だが、ヴォルがいれば不意打ちを受けることもない。

「じゃあ、あそこので試すぞ」

「分かった、僕が攻撃するよ。ネフティス、包帯になってくれ」

前方に見えるサボテンにゆっくり近付く。これは違う、身体を震わせて成長している。ならその隣のサボテンは？動いていない、これだ。

「ラァッッッ!!」

数メートルの距離を一瞬で詰め、ブレイズソードを振り下ろして一刀両断する。毒液を飛ばす間もなく倒せた。

『マスターも危ないねぇ。もし周りに仲間がいたらどうすんのさ』

ネフティスに言われて自身の不注意に気づく。どうやら緊張しすぎていたようだ。悪いな、ネフティスと詫びる。

「ナイスだルーツ！この調子でガンガン狩っていくぞ!!」
そう言ってヴォルはすぐに角笛を吹き始める。今度は僕も慎重にもう一体狩った。そうして狩っていくと正午になる前に目標の二十体の討伐が完了した。
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第四話　次の〝狩場〟へ

□【闘士（グラディエーター）】ルーツ・ハイドレンジ

既にクエストの達成条件は満たしたが、まだ狩り続けている。ドロップアイテムもそこそこ集まった、この量なら五万リル近く稼げるだろう。

「俺のレベルは十八だな。やっぱ支援系のジョブと〈エンブリオ〉じゃレベル上げにくいな」

『こっちはレベルが二十一か。ちょっと上がりにくくなってるね』

「どうする、他の狩場に移動するか？」

ヴォルの〈エンブリオ〉、【排撃狂騒　パン】の能力で、植物とモンスターを判別することが出来るので不意打ちを喰らうこともなく狩りが出来ていた。それと歩くサボテン自体の数が多いのもあるだろう。

しかし狩場の適正レベル帯を超えたのだろう、レベルの上がりが悪くなった。依頼は達成したし、これからはレベル上げに専念するために狩場移動をするべきかもしれない。

僕達が次の狩場に向け移動の準備をしていると、近くで狩りをしていたマスターに声を掛けられた。同じマスターということもあって幾らか言葉を交わしたが、その程度だ。何か用だろうか。

「すみませーん。あなた達も狩場移動するんですか？」

「そうだぜ、何か用か？」

「それならお願いがあるんすけど、私もパーティに入れてくれませんか？」

そのマスターは目はエメラルドのような緑色で、髪は赤色でストレートロングの女性だ。名前はモルジアナ、アラビアンナイトの女奴隷と同じ名前だ。彼女は顔の下半分を隠すスカーフを着け、腰にはサーベルを差している。コルタナでは割と見かける服装である。

「一人でやるのキツくなってたんです」

「ネフティス、ヴォル、どうする？」

『オレは別に』

「別にいいぜ。ここより適正レベル帯の高い場所だけどそれでも大丈夫か？」
ヴォルがレベルの確認をする。パーティ人数が増えるのは喜ばしいことだが、この人とレベルが合わないようであればもう少しレベル上げをしなければならない。
「全然大丈夫ですよ。皆さんとおんなじぐらいっス！」
「じゃあ、決まりだな」
◇
『忘れられた町』から十五分ほど歩いて次の狩場に向かっている。そこそこの距離があったがレベルが上がったおかげで走っていても息が切れない。驚異の身体能力だ、現実の僕とは比べ物にもならない。
「オレにはレベルがないからキツイぜ。また包帯になろっかなー」
人間形態に戻ったネフティスが愚痴を言う。真っ黒の日傘を差していて、僕達より涼しそうだ。その日傘の中は冷気が出ていて涼しいだろ？
「冷気が出ていても暑いもんは暑い！はやく宿に戻りたい……」
「どうです、休憩します？」
「そうするよ」
休憩することになった。
「ルーツ、俺の持ってるアイテム預けるよ。報酬になりそうなのはお前が持っててくれ」
そう言ってヴォルはアイテムを僕に手渡す。時々、歩くサボテンを角笛で殴ってたからな。僅かだがドロップアイテムを持っていたようだ。
日陰見つかったのでそこで休む。アイテムを受け取った僕は手早く、最低限休めるように辺りをキレイにした。
目の前にある『ナジェダ台地』はコルタナから約五キロ西に位置する狩場だ。台地には巨大な岩や奇岩が多くあり、見通しが悪い。また、かなりの広さを誇るため出現するモンスターの強さにもバラつきがある。特に亜竜級と呼ばれるボスモンスターも出るらしい。僕達

では手の余るボスモンスターだ。気をつけなければならない。
そのためモルジアナの〈エンブリオ〉やジョブについて聞き、各々に出来ることを整理している。僕は前衛、ヴォルは楽器を扱う支援系のジョブ。バフ特化で〈エンブリオ〉を使えばモンスターの足止めくらいは出来る。
「私は【斥候（スカウト）】っスねー。危険なんかを察知するんすよ」
結構便利なジョブらしく、【闘士】を五十まで上げたら次はコレを取ってみても良いかもしれない。ただ、あまりステータスは高くないらしいので、引き続き前衛は僕がこなすようになるだろう。〈エンブリオ〉も戦闘系ではないようだし。
あとは新しく覚えたスキルだ。《瞬間装備》というスキルで【闘士】の固有スキルではなく汎用スキルだ。試しに一度使ってみたが、これなら装備する手間も省ける。クールタイムが長いのが難点だが、スキルレベルを上げればそれも解決するだろう。
「あ、ご飯持ってきてるんで食べます？アイテムボックスがあるからいっぱい作り過ぎちゃうんスね」
すっかり打ち解けた様子で提案する。ありがたくモルジアナの持ってきた昼食を頂き、すぐに台地へ向かう。
ヴォルが早く行きたいと急かしたからだ。このクエストを選んだのもヴォルだしな。僕より若いそうなのでその分アクティブで微笑ましい。
□ナジェダ台地　【闘士】ルーツ・ハイドレンジ
◇
「ＧＯＯＯＯＯＯＯＡＡＡＡＡ!!」
「ＲＡＡＡＡＡＡＡ!!」
台地では人型のモンスターも出現するようだ。腰蓑だけのゴブリン。最初は人型だということもあって斬るのに抵抗があったが、次第に慣れていった。
木の盾を構えたゴブリンをスティールメイスで殴りつける。メイスの衝撃で盾を落としたゴブリンを――
「《瞬間装備》!!」

ブレイズソードで逆袈裟に斬り上げる。ＭＰを込め、刃に高熱を付与した剣は骨ごとゴブリンを断ち切った。……この切れ味なら普通に盾ごと斬れそうだな。もう一体のゴブリンはモルジアナが牽制をして、その隙にヴォルが全身を蔓で締め付けていた。

「よっと」

藻掻くゴブリンの首を斬り落とす。ゴブリンは光の粒子となって消えた。あとに残されたのは腰蓑だけだ。ドロップアイテムがしょっぱいんだよな。

『じゃあ、ボス狩りに行こうよ。オレ達ならいけるんじゃないの？宝櫃を見てみたいよ』

「亜竜級は下級職のパーティ一つ分だろ。実際どうなんだろうな。僕達に倒せるかね？」

マスターはティアンとは違い〈エンブリオ〉のステータス補正もある。同レベルのティアンよりは技術を抜きにすれば勝っているだろう。

いや、さすがにまだ亜竜級には届かないか。この台地で最も強いモンスターの【ライトニング・ロックバード】を見上げる。実力的にも物理的にも届かないそのモンスターは優雅に空を羽ばたいている。種族的に相手をするのは厳しそうだな、ワーム類なら何とかなるか？

考えているとモルジアナに肩をたたかれた。

「お疲れーっス。これ水が入ってるんで飲んでください」

そう言ってモルジアナが水の入ったコップを手渡してくれる。冷えた水は喉を潤すだけではなく、精神的な疲れも癒やしてくれるようだ。

「……結構疲れたぜ」

ヴォルは日陰に見を投げ出した。随分不用心だがその気持ちもわかる。一度休んでしまえば、手足を動かせなくなりそうだ。狩りのやめ時かもしれない。

「あーあ、本当に疲れた。眠くなるよ」

……だるいどころではない。本当に手足が動かない。いや動かせ

るのは動かせるが、神経が麻痺したような感じだ。
どういうことだ？いくらなんでもこれはおかしい。
「そろそろッスかね」
「……何がだ？」
モルジアナは片手でパンパンと腰を払い、立ち上がる。
「ああ、水に毒を入れておいたんスよ。皆さん、調子はどうです？」
そう今日の天気を尋ねるように、自然な様子で彼女は問うた。震える手足を懸命に動かそうとする僕の視界には【麻痺】と表示されていた。
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第五話　亜竜級

□【闘士（グラディエーター）】ルーツ・ハイドレンジ

クソッ、アイテムボックスだ！そこに解毒薬が入っている。

だが、体は僕の思いに反してピクリとも動かなかった。体の所有権を奪われたかのような感覚がひどくもどかしい。

「おおっとー、ルーツさん動いちゃ駄目ですよー。動いたらヴォル君の首をグサッですよ、グサッ！」

彼女はすぐそばで僕達の動きや思考を見ていたのだ。僕の思考などお見通しなのだろう。

おまけに辺りは奇岩が視界を遮るようにして立ち並んでいる。ここに誘い込まれたのか、それともこんな場所だからこそ仕掛けたのか。なんにせよ助けは期待できそうにない。

「オーケイですよー。さぁーて、ここからは略奪ターーイ、ん？ヴォル君なんッスかー？言いたいことがあるなら言っていいッスよー」

「なん……でお前こんな……ことを……」

「何でこんなことをしたって？」

んー、と唸りながらモルジアナが楽しげに唸る。僕達を上手く嵌められたことの喜びを隠そうともしない。その態度に苛立ったのか、ネフティスが舌打ちをして〈エンブリオ〉の紋章へ戻った。

「理由の一つは簡単に言えば気晴らし、ですかねぇ。リアルではあたしはいい子ちゃんッスからね。ゲーム内ぐらいは悪い子になっちゃおうと思ったんスよ」

「そういうことを……言ってんじゃねぇ!!……何で平気でこんなこと出来るのかを聞いてんだよッ!!」

ヴォルが怒りを爆発させる。仲間だと思っていた者の裏切りは彼にはどうしても許せないことなのだろう。怒りのあまり言葉が出てこないようだ。

そんなヴォルを見ているからか、僕は不自然なまでに冷静だ。それゆえか一つの疑問が僕の中で生まれる。

「わははー、怖い怖い。逆にルーツさんは冷静ッスね」

「そうでもないよ。……何でお前は状態異常に罹らなかったんだ？」
僕達は水筒の水をコップから飲んだ、それは彼女も例外ではない。もし、コップに水を注いだ後に毒物を入れたとなれば必ず気付いたはずだ。ならばなぜ彼女は状態異常に罹らなかったんだ。装備スキルにもそんなスキルはなかったはずだ。
『このバカ女の〈エンブリオ〉に決まってるじゃないか。僕等とは別タイプの〈エンブリオ〉だ』
ネフティスが苛立たしげに言う。ネフティスの言葉を肯定するようにモルジアナが言う。
「？ああ、そんなことッスか。あたしの〈エンブリオ〉ですよ。おいでアスクレピオス」
そう言ってモルジアナは服の袖口に隙間を開ける。僅かな隙間から一匹の白蛇が這い出てくる。たいして大きくもない、精々三十センチほどの大きさの蛇だ。
僕とヴォルとも違うタイプの〈エンブリオ〉、ガードナーか。
「このかわいい蛇ちゃんの能力ですよー。あたしの罹った状態異常の無効化、便利でいいでしょ。さておしゃべりはここまでッス」
白蛇を服の中に入れ、アイテムボックスから短剣を取り出す。腰に着けていたアイテムボックスを取り外し、僕の方へ来る。
「今アイテムはルーツさんが持ってんスよね」
僕のアイテムボックスに向けて短剣を振り下ろす。アイテムボックスは無惨にも引き裂かれ、中身が地面へばら撒かれる。それにモルジアナが自身のアイテムボックスの口を近づける。するとそのアイテムボックスは掃除機のように落ちた物を次々と吸い込んでいく。
「よしっ、これで終わりッス。じゃあ、皆さんモンスターに襲われなければ無事にコルタナに帰れますよ。さよならー」
そう言ってモルジアナは立ち去ろうとする。麻痺した体では彼女に追いつけない。それにマスター同士の争いでは国は関与しない。加えて僕らは彼女の髪や目の色だけで隠している顔は見たことがない。追跡するのは不可能だ。

じゃあ、泣き寝入りしろって言うのか？言いようのない思いがこみ上げる。落ち着いていられるわけがない。
それはヴォルも同じだ。
『ヴォルが武器を持ってる、戦うつもりだアイツ！』
「待てゴラァ！そのまま逃げれると思うなッ!!」
ヴォルが震える手で角笛を持ち、素早く旋律を奏でる。聞いたことのない旋律、身体強化の類ではない。これは――
「――耐性の付与か!!」
体の痺れが取れると同時に後ろへ飛び退く。高速で僕目掛けて飛来する短剣を手刀で叩き落とし、次の攻撃に備える。
モルジアナはため息をついて新しく短剣を取り出した。
「あぁーー、やっぱこういう事もありますかー。リハーサルって大事ッスね。いやホントに」
「……？それより大人しく投降すればデスペナまではしないぞ。両手を挙げて跪け」
モルジアナはガリガリと頭を掻きながら、短剣を逆手に持ち構えを取る。
「まさか、あたしがルーツさんよりレベル低いと思ってましたか？そんなわけないですよ。安全マージンを取ってますからね」
その言葉通りモルジアナのレベルは七十近くある。さっきまで二十程度あったレベルが五十近く上昇している。それは彼女のメインジョブが【暗殺者】に変化していることと関係があるのだろう。
「さて、今すぐ投降すればちょっと殺すだけで許してあげますよ？」
「抜かせッ！」
被弾覚悟、剣を振りかぶり彼女を両断せんと距離を詰める。隙だらけ、しかし躊躇なく迫ってくる姿に驚いたのか僅かに後退り――地を蹴って僕を迎え撃つ。ＡＧＩは圧倒的に彼女の方が早い。
「クッ！」
モルジアナは肩や手を斬りつけると素早く距離を取り僕の動向を窺う。
まだ見せていない僕の〈エンブリオ〉を警戒しているのだろう。そ

の間にヴォルが身体強化の旋律を奏でるがステータスはまだ彼女には及ばない。
「ストレス発散になるかと思って盗賊ごっこをやってみましたが……、意外と楽しいッスねぇ。案外、自分に合ってるのかなぁ？」
「僕に聞いてるのか？おしゃべりは後でだ！」
再度、モルジアナに攻撃を仕掛ける。さっきより彼女の動きが見えるが追いつけない。一度の攻防で僕は幾つも手傷を負うが彼女は無傷だ。スキルを発動して共倒れを狙う、それとも逃走するか。クソッ、どうすれば――
「ルーツ！時間を稼いでくれっ！」
ヴォルの声に我に返る。振り向くとヴォルが任せろと目配せする。
『それか前向けって言ってるんだよ。ゴチャゴチャ考えずに突っ込むんだよ。こんな奴さっさと倒すんだ』
ああ、そうだな。お前の言う通りだ。ヴォルには何か考えがあるのだろう。なら、自分は精一杯それを手伝うだけだ。
「ほらほらー、どうしたんスかぁ？ヴォルさんも笛ばっか吹いてる場合じゃないですよー」
「おいおい、こっちを見ろよ。よそ見してると死ぬぞ!!」
挑発を繰り返す彼女を気にせずに攻撃を行う。彼女の攻撃は速く軽い。僕の方が一撃の威力が大きいはずだ。
そしてＨＰの補正が大きいネフティスとは異なり、耐久力も高くないので彼女は慎重になり過ぎるきらいがある。故に――
『「攻め続けるッ！」』
◇◇◇
先程より激しさを増し戦闘を再開したルーツ達に目もくれずヴォルは一心不乱に角笛を吹き続ける。
音楽家系統のジョブスキル、《音楽は全てを繋ぐ》はＭＰを込めて演奏をすることで発動するスキルの威力を高めるスキルだ。そのスキルを使い〈エンブリオ〉のスキルの威力を高めている。
発動するスキルは〈エンブリオ〉が第二形態へと進化したことで習得したスキル。

今の不利な状況を覆し、三人を勝利へと導くスキルか――
「《ネバー・エンディング・パニック》！」
――それとも敗北へ導くか
ヴォルがスキルを発動させる。
スキルの効果は自身より格下のモンスターへの【恐怖】、【混乱】の状態異常の付与し――【恐怖】、【混乱】の通じない格上のモンスターからはヘイトを集めるスキル。
ヘイトコントロールに値するスキルだ。そしてヴォルが狙ったのはただ一体のモンスター。

燦々と降り注ぐ陽光が何かに遮られ、岩場には影が落ちる。
「……これがヴォルの秘策？」
ルーツが呆然として呟く。ネフティスもモルジアナも声一つ出さずそれを見つめている。
岩場に巨大な影を落とした怪物の正体。
遥か上空を羽ばたいていた筈の【ライトニング・ロックバード】がそこにいた。
「何で!?自滅する気ですかっ!!」
「ＧＧＧＹＹＹＡＡＡＡＡ!!」
最初に仕掛けたのはルーツだった。岩を蹴り、上へ跳び斬りかかる。対して【ライトニング・ロックバード】はその行為を嘲笑うように鳴き、大きく羽ばたいた。ルーツの体は布切れのように宙に舞い、地面へと叩きつけられる。
モルジアナは立ち向かわず逃げることを選んだ。ヘイトを集めたヴォルとルーツを置いて逃げることで自身の身の安全を守ろうとしたのである。
だが、その判断は裏目に出た。
「ＧＧＧＹＡＡＡＡＡ!!」
甲高く鳴き、体に雷を纏わせ巨鳥は突進する。
「何でコッチ来るんスか!?」
モルジアナの方へ巨鳥の注意が向いている隙にＭＰの枯渇で倒れ

たヴォルをルーツが岩の陰に連れ込む。
「何やってんだ！一歩間違えば僕たちが死ぬところだったんだぞ!?」
「……それでもアイツに負けるよりは良い」
そう言ってヴォルは岩に寄りかかり巨鳥を窺う。既に勝敗はついているようだった。健闘むなしく地に倒れ伏したモルジアナを見下ろし、【ライトニング・ロックバード】は飛び去っていった。
後にはズタボロのモルジアナが残されている。
「……で、どうする、今殺っとくか？」
ルーツは顔をしかめ、首を横に振る。
「人を殺すのはマスターでも後味が悪い。装備を奪って拘束しよう。ネフティス、手伝ってくれ」
そう言って女盗賊を捕らえるため歩き出した。
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第六話　霧の中の魔物

□【闘士（グラディエーター）】ルーツ・ハイドレンジ

「ヴォル、大丈夫か？フラフラしてるぞ」

「問題ねぇ。それよりルーツはこいつを見張っててくれ。どうにか逃げ出そうとするかもしれねぇからな」

全身を蔓でがんじがらめに締め付けられたモルジアナには意識が無かった。ＨＰの減少によって【気絶】しているらしい。

『ルーツ、やっぱここで殺そうよ。オレ達に復讐に来るかもしれないんだぜ？』

「殺したら余計恨みを持たれるだろうよ。デスペナは三日間だからな。僕達には三日後のことかもしれないが、コイツにはつい一日前のことになるんだ」

足を踏んだ方は覚えてなくても踏まれた方は忘れない、と言う。面倒ごとは避けれるなら、避けるに越したことはない。

ミノムシみたいになったモルジアナを脇に抱え、台地の外へ向かう。道中、ティアンの冒険者に出会ったが〈エンブリオ〉の紋章を見せると「マスターなら問題ない」とあっさり納得してくれた。

僕が思うにマスターは同じ人間として見られていない節がある。殺しても三日後には蘇る、得体のしれない（エンブリオ）力を使うなどなど。考えてみればこの世界の理から随分逸脱した存在だ。

それゆえ多少の無茶も、マスターなら、と許容されてしまうのだ。

そんなことを考えているとモルジアナが起きた。

「むがー！　何で全身ぐるぐる巻きなんです⁉　ひどいです⁉」

起きて早々僕達に非難の声を浴びせてきた。ひどいのは僕ではなく、盗賊行為をした彼女だろうに。

「ヴォル、モルジアナに猿轡をしてくれ。うるさすぎる」

「鬼ですか！　こんなかわいい女の子に猿轡をするなんて⁉」

「顔隠してるだろ。お前は台地の入口あたりに置いていくからな」

「そんなぁ……」

脱力して哀れっぽく見せようとしても無駄だ。蔓を解いたら何をしてくるか分からない。絶対に解かないぞ。
「例えお前がゴブリンに襲われようとな」
「あたし何されるんスか!?」
ギャーギャー喚くモルジアナを抱え歩いると、何処からか叫び声が聞こえた。
騒いでいる奴がいたので聞こえにくかったが、ヴォルも聞こえたようだ。
「なんだ今の声……？さっきのティアン達が去っていった方から聞こえたぞ」
ヴォルの声には彼らを案じるような響きがあった。
だが聞こえた声は、人間のものでは無かった気がする。少し曖昧だがあの叫び声は鳥の鳴き声に近かったような。
ハゲワシかなんかがモンスターに襲われたか。
それに鳥と言えば――
「【ライトニング・ロックバード】がいないな……」
上空を優雅に飛び、モルジアナを気絶させたモンスターの姿が見えない。さっきまで僕達を監視するように飛んでいたのに、今はその巨体を何処に隠したのか。影も形もない。
ひょっとするとティアンの冒険者達があのモンスターを狩ったのかもしれない。そう考えれば辻褄が合う。
大して強そうに見えないパーティだったが、きっとそうに違いない。
「ふふん、なあ多分だけど謎は解けたぜ。あの声はな――」
『ルーツ、あそこ!!』
せっかく謎解きをしてやろうと思ったのに、ネフティスに遮られた。文句を言ってやろうと思い、ネフティスの指差す方を向いて――凍りついた。全員の表情と動きが凍りつく。
「……俺も謎が解けたぜ、ルーツ」
ヴォルがボソリと言う。謎が解けたも何もない。
答えはそこに示されていた。

目線の先には【ライトニング・ロックバード】の姿が見えた。巨岩が多く連なるこのナジェダ台地でも一際巨大な奇岩。細く切り立った岩の上にそれはいた。
ただしその翼は半ばで喰いちぎられた姿で。
頭部はドロドロに溶け、雷を宿していた眼は眼窩からはみ出している。
「ＧＲＲＲＡＡＡＡＡ!!!」
巨鳥が光の粒子となって消える。巨鳥を殺した下手人――人ではない――が威嚇音とともにその岩を滑り降りる。
「なんで、なんでこんな場所に純竜級がいるんス
か!?」
岩からゆったりと降りるそのモンスターには【アシッド・キング・スネーク】と表示されている。名前のからしてボスモンスターだろう。巨大な蛇、そんな馬鹿みたいな感想しか出てこない。
唐突な出来事に反応が遅れた。何をしたらいい、最優先は何だ？思考ばかり先回りして体は動かない。
ヴォルが叫ぶ。
「走れ、逃げるぞ!!」
その言葉が体の縛りを解いた。
怪蛇に背を向け、脱兎のごとく逃げる僕らの後ろから叫び声が聞こえる。何の声だ、と推測しかけてすぐに思い出す。
ティアンの冒険者だ。僕らよりも彼らの方が非常に危険な場所にいる。
「助けに行こう！」
僕と同じ考えに至ったヴォルが足を逆の方向に向ける。
「待て、何か来る!!」
怪蛇の降りたあたりから煙がのぼっている。
いや煙ではない、霧だ。
濃霧はあっという間に台地の包み込んだ。そして霧に包まれた瞬間、皮膚が泡立ち、沸騰したかのような感覚に襲われる。
「ゴホッ、これ！体がっ！」

「ヴォル、来い!!」
【溶解毒】と表示されている。その名が示す通り体を溶かす毒のことだろう。まわり草木が音を立てて溶けている。状態異常を付与しているのは、この霧に違いない。
痛覚をオフにしているから痛みはない、だが呼吸が出来ない苦しみはある。少しでもこの場所から離れるため、二人を引っ張って外を目指して走る。
その時、抱えられたモルジアナが安堵の声を出した。場違いなまでに落ち着いた様子で――
「――ああ、これなら大丈夫っスね」
と言った。
◇◇◇
五人の冒険者が地を這い、少しでも霧から離れようとしている。辺りに蛇の姿はない。なら今のうちだ。
「大丈夫か!」
皮膚は爛れているがこれならまだ治せる範囲だ。ポーションを無理矢理飲ませる。
「アス、癒やせ」
モルジアナの〈エンブリオ〉であるアスクレピオスは咬んだ相手の状態異常を無効化できる。無効化できるのは、過去にモルジアナ自身が罹った状態異常のみ。
「色々な状況に備えて準備してたんスけど、それがこんな風に役立つとは思いませんでしたねー。それとヴォルさん、約束は守ってくださいよ」
「分かってる。お前も守れよ?」
僕とヴォルはモルジアナと契約を交わした。口約束だが。
僕達はモルジアナが治した人一人につき一万リルを支払い、それとは別に治した者からも謝礼を貰う必要がある。その代わりにモルジアナは霧の中で見つけた者はみな治す必要がある。
「これでかんりょー。次は――」
ポーションを飲み、怪我が治った男が決死の形相で言う。

「逃げろッ、近くにヤツが居るぞ!!」
「ＧＧＹＹＲＲＲＡＡＡＡＡＡ!!」
濃霧の中から怪蛇が飛び出してくる。モルジアナを突き飛ばし、間一髪のところで攻撃を避けた。
避けた時に牙が肩を掠めた。その部分が音を立てて溶ける。
「先に行け!!」
助けた冒険者達が死んだら元も子もない。そしてモルジアナがいなければ人を助けることはできない。
だったら、ここは僕がやるしかない。
怪蛇は鎌首をもたげ、逃げる獲物に向けて突進をする。丸太のような体が一筋の光閃となり、大地を抉り進む。
「させるかァ!!」
メイスで頭部を殴り、軌道を逸らす。
反動で3メートルほど吹き飛ばされるが、問題ない。直線的な軌道故にタイミングさえ合わせれば傷も最小限で済む。
『霧の効果と範囲にリソースのほぼ全てをつぎ込んでるんだ。そのせいで大したステータスじゃない』
ネフティスの言う通りなら、僕達にも十分勝ち目はある。例外的に高い防御力はスキルを使用して対抗すればいい。
『スキルを使うのか?』
ああ、使わなきゃ負ける。そうなったら次はあいつ等が狙われる。それはなんとしても避けたい。
目の前の怪蛇を睨みつける。冒険者達を見つけれたのはコイツが止めを刺さず、助けに来た者を喰らうための罠として利用したからだ。
『正直、オレはモルジアナの言い分の方が正しいと思ってる。何処かの誰かを助けるために自分が死ぬのはおかしい』
かもな。じゃあ時間稼ぎに徹するべきか?だけどお前はそうは思わないだろ。
『そうだね』
ネフティスは肯定した。

『たかだかデカイ蛇一匹を前にしてスゴスゴ引き下がるなんて馬鹿馬鹿しい。倒すぞ、ルーツ！』
獲物に逃げられた苛立ちか、唸り声を上げ体を鞭のようにしならせ叩きつける。避けられず岩肌に叩きつけられる。体は岩にめり込み続く連撃を正面から喰らう。
「ＧＧＧＹＹＹＡＡＡＡＡ」
邪魔者を片付け、必死に逃げる獲物を追うため体の向きを変える。だから、死んだ筈の邪魔者からの一撃を避けれなかった。
「ラアァッ!!」
「ＧＧＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ!?」
頑強な鱗が破壊され、肉が露出する。
「行くぞ、ネフティス！」
『ああ、絶対に倒せ』
人相も分からないほど包帯を巻かれたミイラ男が怪蛇の前に立つ。格は圧倒的に蛇の方が上だが男には怖れは見えない。ただ、自然体でそこにいる。
『例え、死んでも、だ！』
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第七話　抗う死者

□【闘士（グラディエーター）】ルーツ・ハイドレンジ

跳躍し、怪蛇の頭部を殴りつける。メイスでどれだけ殴ろうと傷一つつかない頑強な鱗が砕け落ちる。

「その程度か!?」

激昂し、突進してきたところをかち上げる。下顎を捉えたその一撃で蛇の頭がかっ飛ぶ。無防備に腹を見せた怪蛇に容赦なく続く連撃を叩き込む。

「ＧＲＡＡＡＡＡＡ!?」

肉が抉れ、返り血で全身が紅く染まる。

体が思考よりも速く動く。視界にあるものを手当たり次第に殴る。怪蛇の反撃、それを避け懐に潜り込む。

悲鳴を上げて怪蛇が後退する。だが、怪我の影響からかその動きはぎこちない。

『ルーツ、あと七分！それまでに決着をつけるぞ!!』

「ああ！」

距離をとって態勢を立て直した怪蛇は、攻撃の構えを取る。鎌首をもたげ、頭部を不規則に揺らし射線を特定させないようにする。

僕には物理耐性があるし、多少の衝撃ならダメージもろくに喰らわないだろう。だけど、わざわざ目に見える危険に突っ込み危機に陥りたくはない。

「ＧＲＲＲＲＲＥＥＥＥＥＥ!!」

少しずつ霧が晴れてくる。ヤツが弱っている証拠だ。

「目くらましだ!!」

メイスを地面に突き立て、岩を掘り起こす。

ヴォルのバフ、ネフティスのスキルにより引き上げられたＳＴＲは少年漫画のキャラのように桁外れだ。

岩石を野球ボールに見立て、標的に向けて打つ。

「ＲＲＲＲＡＡＡＡＡ！」

高速で飛来する岩石を避けるため、攻撃の構えを解く。だが、岩石

は避けれても、その陰から弾丸の如く飛び出してくるメイスの一撃は避けられなかった。
さらに剣を《瞬間装備》し、斬撃を浴びせた。
◆◆◆
純竜級の蛇は取るに足らない羽虫のような存在に圧倒されていた。存在の格は圧倒的に蛇の方が上。
だが、どちらが今この場を制し、上位に立っているか。それは火を見るより明らかだ。羽虫のような白いニンゲンだ。
「ＲＵＵＵＵＵＵＵＵ……」
故に怪蛇は戦い方を変えることにした。
わざわざ真正面から力比べをせず、淡々と敵の弱点をつく。
「ＧＹＵＵＵＵＵＵＵＵ！」
台地を再度、霧で満たす。防御にまわしていた意識は回避に専念させる。
例え、毒を無効化する薬を飲んでいたとしても問題ない。何時間も、何倍も強い毒でこの台地を満たしてやろうと。
もともと、これは遊びだ。同条件で争い、危機に陥る気はない。
◇◇◇
体力が少しずつ減ってきている。
「まだ、力を隠してやがったか……」
明らかに蛇は、こちらと正面から戦い勝つことを諦めたようだ。毒の霧はより強力な毒に変化している。
そして蛇は霧に紛れ、攻撃をするつもりもないようだ。嘲笑うように鳴きながら、攻撃を避けている。
『あと三分……！くそ、卑怯者め!!』
ネフティスが悔しげに呟くが、それは僕も同じだ。
もともと、ヤツには僕達と戦う利点がない。そして、実力差も大きい。スキルの制限時間のことは知らないだろうが、このまま逃げ続ければ僕達の負けだ。
「……何か策は無いか!?」
『何もねーぜ。ヤバい、どうにかしなくちゃならねー……！』

どうする。怪蛇を怒らせ、冷静でなくすにはどうしたらいい？ヤツは僕達を格下だと思っているが侮ってはない。そんなやつを怒らせるにはどうすべきか。
それは、最初と同じように予想外の攻撃を喰らわせることだ。
「……ちょっと無茶するぞ」
もし、予定通りいけば酷い怪我を負うだろう。一か八の賭けになるかもしれない。
だが、ネフティスはあっさりと納得してくれた。
『いいぜ！任せた。このままじゃジリ貧だからな』
「任されたよ。じゃあ、せいぜい頑張るしかねねね！」
大地に足跡がめり込むほど強く踏みしめ、飛ぶ。自分でも制御できないほどの速さだ。
真っ直ぐ飛んでいき、怪蛇の巨体にメイスを突き立てる。
「ＧＲＡＡＡＡＡＡ！」
怒りで目を見開き、激流のように強くなめらかに頭を動かし、僕の腕を噛み千切る。巨体の上を転がり落ちて、再度メイスを構える。
だが、片腕を失った姿は弱々しい。これは演技だ。ミイラ化した状態では四肢の欠損は大した影響じゃない。
そして、それはこの怪蛇も薄々感づいているだろう。物理に対する耐性、毒霧の無効化、唯一まともに通じるのは牙のみ。今ならヤツの行動もある程度予測できる。ヤツはこの絶好のチャンスを無駄にしようとは思わないはずだ。
怪蛇が口を開けて、体を噛み切ろうとする。
――そこへ、僕は飛び込んだ。
『ルーツ！』
咄嗟に口を閉じようとした怪蛇の顎をメイスで強引に開かせる。ヌメヌメとした唾液と喉奥から噴きつける毒霧で包帯が溶け、ボロボロの肉体が顕になる。だが、そんなの関係ない。
「これでっ！どうだ！！」
メイスを滅茶苦茶に振り回す。巨大な牙にぶち当たり、そのまま砕き割る。舌が動き、口内に入った不届き者を外に出そうとするが、そ

れは肉にメイスを突き立て耐える。
「ＵＵＵＲＲＲＲＵＵＵ!?」
出すのではなく、次は舌で押し潰そうとしてくる。メイスが弾き飛ばされた。
上下から強い圧力がかかる。片腕だけでは耐えきれず、体が少しずつ沈んでいく。
『ルーツあと二分!それであっちは再発動可能!!』
「おう!終わりだ《瞬間装備》!!」
渾身の力で僅かにを開ける。残った片腕でブレイズソードを上に突き出す。僕の力と怪蛇自身の圧力で熱刃はあっさりと鱗を突き破った。そのまま剣を振り抜き、上顎を縦に切り裂く。
「Ａ!?ＧＲＡＡＡＡＡＡ!!!」
刃は戻され、更に怪蛇の顔から剣が突き出ては戻される。そして、喉の奥を熱刃で貫かれ、ついに絶命した。
◇◇◇
霧が晴れた。さっきまでの騒乱が嘘だったのかのような快晴だ。思えば、十数分にも満たない時間だったのだ。……それにしては、色々あったが。
「ヴォル君、終わったようです」
「そうか。やったのか、ルーツは」
嬉しそうにそう言って、ヴォルはアイテムボックスを私の手に乗せる。更にその上に何かが書かれた紙切れを。
「何ですか、それ?」
「俺のサインだ。これがあればお前でもアイテムを買い取って貰えるだろうよ」
それはありがたい。もし、それがなければ随分買い叩かれてたでしょうから。カルディナにいくつかあるそういう店は、出処を聞かない代わりに通常の取引価格より大きく安いのだ。
「そう言えばルーツさんを助けに行かなくて良いんですか?」
「無駄だな。多分、死んでるから」
どうやら、色々難儀な能力を持っているらしく、生きてる見込みは

低いとのことだ。そう考えると、私のアスちゃんは素晴らしい使い安さだ。
「ねー、アスちゃん」
「アスちゃんて、滅茶苦茶安易なネーミングだな」
「何を言ってるんですか!?ならヴォル君はなんて名前にしますか？」
ヴォルはニヤリと笑って言う。
「スーパーアスクレピオスだな」
「まずいですよ、それはっ!!」
◇◇◇
「あー、これで終わりだな」
「ああ、次は止めてくれよ。こんな頻繁に死なれちゃ困る」
「善処する」
「善処しない人間のセリフだね、それは」
また、死ぬ。でも、今度は最後を見届けることが出来たのが救いかな。もう時間だ。
「ほんとに悪いな。嫌なら嫌って言ってくれて良いんだぜ」
「……オレはマスターのやりたいようにやらせるつもりだよ。基本的にはね」
言葉を切って、更に続ける。
「だから、きっちりやり切ってくれたらそれで良いんだ。だから、後悔はするなよ?」
「ああ。もちろんだ」
どうにかそう返すと僕の体は光の粒子となって消えた。
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第八話　終幕

◇【闘士（グラディエーター）】ルーツ・ハイドレンジ

デスペナ明けから早々、僕達はヴォルとモルジアナにせがまれ、【アシッド・キング・スネーク】のドロップ品を見せている。

まさか、宿の中で待ち構えてるとは思わなかったぜ。

「もしかしたら、すっごいレアな装備が手に入るかもしんないスよ！」

「ルーツ！早く開けようぜ！」

宝櫃と呼ばれるそれにはレアアイテムが、ランダムに一から五個手に入るらしい。あれだけの苦労をして手に入れた物だ。犠牲の対価としては十分だろう。

「おお！これは……？」

中に入っていたのは二つの【ハイエメンテリウム】というアイテムだ。取引価格は一つ十万リル。

「これさぁ……普通に狩りをしてた方が報酬いいよね」

「……しょっぱいな」

「あーあ、残念」

というか、なんでモルジアナがここに居るんだ。仲間みたいな感じで振る舞ってるけど違うだろお前。

「いや、もう仲間ですよ、あたし。めっちゃ皆のために頑張ってたじゃないスか!?」

「ヴォル、結局報酬はみんな渡したのか？」

「ああ、渡しちまったぜ。お前がどうしても俺達に返したいなら、返してくれてもいんだぜ」

空気が変わったのを感じ取ったのか、モルジアナは少しずつ扉の方に近づくいていく。

「あー、ちょっとこれから用事があるんで――サイナラッ！」

「あっ、待ちやがれ！」

疾風のようにあっという間に走り去って行くモルジアナを追って、ヴォルもドタドタと追い掛けていく。モルジアナの方がレベル高い

から追いつけないだろうな……。
「怒涛のごとく過ぎ去ったね」
「まったくだ」
勢いと元気が凄いな。
さてと、これからどうする？ひとまずはこれを換金して、あいつらの分をここに残しとくか。
「じゃあ、買い物行こうぜ。新しい服が欲しい」
それで良いんじゃねえのか。形態変化したら元の服に戻るだろ。
「日常用に決まってるだろ？これでも身だしなみには気をつかってんだ」
「じゃあ、僕のも選んでくれ。普段、何を着たら良いのか分かんないんだ」
リアルではほとんど同じ服を着回してるからな。このままだと、戦闘着で日常も過ごすことになりそうだ。常在戦場？そんな武士みたいなキャラになるつもりはないな。
「オッケー！じゃあ、早く行こうぜ」
「わかったわかった。だから、そんな引っ張るなよ」
勢いよくドアを開けて、僕達は昼の商業地区に飛び出していった。
◇◇◇
長袖、長ズボンと見ているだけで暑苦しくなる格好だが、コルタナではこれが普通らしいので文句は無い。
「割と地味だけど、これでいいか？うん、良しとしよう」
勝手に納得して、拒否権を与えられなかったので僕の文句なんかは大して意味がないのだろうが……。まあいい。これで普段着が出来た。あとはこれの色違いでも買っておけば良いだろう。
「え、何言ってんの？ちゃんと服を選べよ。この店で終わりじゃないぞ」
「……マジか。いつも同じやつじゃいけないのか？」
「ダメダメ！さあ、あっちの店行くぞ！」
買い物を二人で楽しんでいると、いつの間にか日が暮れていた。街灯の光が街を満たし始める。上から見ればさぞ良い眺めとなってい

るだろう。日が暮れてもなお人の絶えない通りではなく、路地を通って宿へ向かう。
「……あの日を思い出すね」
「そうだな」
有り余る富が更なる富を呼び込み、大きな繁栄を手にしたこの国は決して理想的な国などではない。通りから外れれば、見たくもないようなものを見るハメになるかもしれない。
「この路地の先には、助けを求める誰かがいるかもな」
「もし居たら助けるの？」
あの時と同じように。
「助けに行くさ」
「ふーん」
会話は途切れ、あっという間に宿の前まで着いた。
だが、ネフティスは入ろうとはしない。自然、僕の足も止まり、無言で佇む。
「これから、オレ達より遥かに強い敵と戦うことがあるかもしれない。誰かを護る為に戦いに迫られることがあるかもしれない」
一度言葉を切って、続ける。
「そうなったら、オレはきっと逃げろって言うと思う」
「そうか。なら、僕は言う通りにした方が良いか？」
「その時はあんたの判断に任せるさ。……あんたより大事な物はない。だからこそ、逃げてほしいと思うし、自身の意思を一番にして欲しいとも思う」
ネフティスが僕の目を見て言う。
「だから、約束してくれ。中途半端な生き方はしないって。後悔を残すようなことをしないって」
「当たり前だ」
ネフティスの生きるこの世界、彼女は僕とは思いや見えている物が違うのかもしれない。死に対する思いも、きっと僕より重く考えているのだろう。
そのネフティスが中途半端にするなって言ってるんだ。

「何があっても諦めない。曲げないし、折れない。死んでもだ」
「約束だよ」
「ああ」
そう言うとネフティスは宿の中へ、駆け足で入っていく。中にはモルジアナとヴォルの姿が見えた。食事でもとって、僕達を待っていたのだろう。
宝櫃の取り分の話もしなきゃな、そう思いながら僕も宿の扉を開けた。
Ｆｉｎ